
夜を走る

きみよし藪太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜を走る

【Nコード】

N4586M

【作者名】

きみよし藪太

【あらすじ】

小汚い中華料理屋の店で、そう美人でもない女に気に入られた。

俺の連れは昨日ラジオで占いを聞いたらしい。

俺の今日の運勢は、女をひとり拾う、というものだったのだろうか。

夜を走って、と言われて、俺はスクーターを盗む。

意味もなく高いだけに見えるビル群の足元にその長い長いトンネルはあった。中のライトは珍しくオレンジ色ではなく淡いような深いような青味の強い緑色をしていて、歩道もあつたけれど時間のせいか誰も歩いてはいなかった。

スクーターの後ろに女を乗せて走る。

名前は知らない、さつき声をかけられたばかりで、ついでに言えばバイクも誰の持ち物なのか分からなかった。

「運命を信じる？」

裏路地の小汚い、電飾ばかりがやたらと派手な狭苦しい店で彼女はヌードルを食べていた。ひどくつまらなそうな顔をしていたし、出入り口のところに座っていたので自然と目に入っただけで、別に取りたてての美人だとかナイスバディだった訳じゃない。

「あたしは信じてない、でも今日は立て続けに嫌な事ばかりが起こったからちよつと気分が悪いの」

透明なスープのヌードルをプラスチックのフォークでいやいや食べている女は、好き嫌いを直しなさいと怒られている子供のようだった。そんなに食べたくないのなら残せば良いのに、と思ったけれど口に出す訳にもいかない。

「飼ってる猫が死んだわ、ママが入院した、そして男と別れたの」

連れの男はそれでも女を気に入ったらしく、ちよつとナンパしてくる、だとか、やらしてくれるかな、だとか言っただけの腹の減り様

などまったく考えもしてくれないようだったけれど、声を掛けに行った連れが戻って来て、ビールを注文していた俺に向って真っ先に放った言葉は「お前の方が気になるらしいよ」というものだった。

俺の方を気にされても困る、俺は腹が減っている。

「何が悲しいってあの男と別れちゃった事よ、これからだったのにね、すべては。だけれど終わってしまった事を悔やんでも仕方がないのよ、たとえ途方に暮れてしまうほど息苦しくて死んじやいそうでもね」

とりあえずの注文で塩スープとにんにく揚げ、軟骨の唐揚げとアイドルを。最後に付け足したのは女の食べているものが気になっていたので、しばらくしてから気付いた。

「別れてから気付いたの、すごく好きだった事に、だけどあたしは一度終わっ

てしまったものを信じないと誓いを立ててしまった事があるから」

仕事帰りにラジオつけると、なんかいつも明日の運勢っていう占いが流れててさ、と連れが言った。塩スープに揚げパンを浸して食す、思っていたよりも固いパンは古い油の味がした。

なんか気になるんだよ、その運勢。結果は半々くらいかな、良い事と悪い事、お前ってどっちを信じるタイプだ、オレは良い事しか信じたくないって言いつつ悪い事が気になるタイプなんだけどさ。

シウマイを追加する。女が俺を振りかえった、俺はそれを見無視してビールを飲んだ。

「ね、あたしを送って帰らない？」

「……俺の知り合いだったっけ？」

つまらなそうにヌードルを食べていた女はそれを食べ終えたのか席を立ち、何気なくその脚を見ていた俺の方に真っ直ぐ寄ってきた。

なんの躊躇いもなかったの、なんだかそれは良いと思った。

「知り合いの顔を忘れるような男は知り合いに居た記憶がないわ」

「男が欲しいなら他を当たってくれ、なんなら連れを貸そうか」

「いや、あたしはあなたがいいわ」

「何故」

「さっき、あたしをつまらない女って目で見ながらこの店に入ってきたから」

丸めた五千円札をポケットから出し、女は濃いオレンジ色のちやちなテーブルの上にバンと置いた。それから俺の連れに「この人借りるわ」と言い捨てると、俺の腕を取って外に出た。抗おうと思えば出来ただけれど、面倒だったのもある。そこらのスクーターを盗んだ。そういう事は昔していたから、鍵をいじるのはとても簡単だ。

「どこまで送ればいいんだ」

俺は知らない人間を普段構ったりしない。

今日も構う気分ではなかった、しかも大した女じゃない。鼻が上を向き過ぎているし、目は細すぎる。口がでかすぎて男を取って食うようだった。それなのに。

「夜を走って」

あたしを乗せて夜を走ってよ、と女は言った。その言い方だけが気に入ったので、俺は女を送って行く事にしたのだ、理由なんてそんなものだ、いつだって意味も価値もない。

スクーターを走らせて、青白いトンネルを走った。長い長い夜みたいなたんネルだった。女は長い髪を風に流しているのか、俺の背中にべったりとしがみついて首元に何か呟いていたけれど、景色のように流された声は欠片も耳に届かなかった。どこまで行けばいいのかわらなかつたので、途中でバイクを止めて聞かなくては、と思つただけれどトンネルはなかなか終わらず、名前も知らないままに女と別れるのも人生の不思議で楽しいのかもしれないと考え、バイクを降りたらタバコでも吸おうと思つた。

連れが昨日聞いた俺の運勢は、知らない女を拾うというものだったのかな、と少し思ったけれどもバカバカしすぎて自分で笑った。夜だけが、名無しのままの俺達を許容している。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4586m/>

夜を走る

2010年10月11日04時06分発行